放送用語委員会（東京）

ことばの読みについて（連濁の語を中心に）

～『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂にあたって～

平成25（2013）年9月27日（金），放送センターで第1372回放送用語委員会が開催された。前回の放送用語委員会に引き続き『NHK日本語発音アクセント辞典』（以下，『アクセント辞典』という）改訂にあたって，ことばの読みを審議・検討した。今回は「連濁」の問題を取り上げた。濁音化をするかしないかでゆれが生じている語12語である。「連濁」とは，「カ」「サ」「タ」「ハ」行ではじまる語頭清音が，語の複合によって濁音化する現象のことである。

検討した語
1. 芋焼酎（イモショーチュー／～ジョーチュー）
2. 奥深い（オクフカイ／～ブカイ）
3. 返り咲く（カエリサク／～ザク）
4. 河川敷（カセンシキ／～ジキ）
5. 過払い（カハライ／～バライ）
　未払い（ミハライ／～バライ）
6. 過不足（カフソク／～ブソク）
7. 高利貸し（コーリカシ／～カ゛シ）
8. 凍え死ぬ（ココ゛エシヌ／～ジヌ）
9. 税引き（ゼーヒキ／～ビキ）
10. 庭作り（ニワツクリ／～ズクリ）
11. 見え隠れ（ミエカクレ／～カ゛クレ）
12. 紫水晶（ムラサキスイショー／～ズイショー）
＊鼻濁音は「カ゛」とした。また，発音を示すため「ヅ」ではなく「ズ」を使用した。

今回の用語委員会では「用語の決定」はしない。用語委員からの意見を受けて，事務局でまとめたうえ，再提案する。

● 議題

1.「芋焼酎」の読み

変更案

① イモジョーチュー　② イモショーチュー
（これまで　◯イモショーチュー
　　◯イモジョーチュー）

変更理由

アナウンサーからは「～ジョーチュー」を第1読みにしてはどうか，という指摘があった。国語辞典の掲載では，当初「～ショーチュー」だったものが「～ジョーチュー」に変化してきている。

調査の結果でも，高年層ほど「～ショーチュー」が多く，若い年代を中心に「～ジョーチュー」が多い。「イモジョーチュー」を第1読みとし，「～ショーチュー」を第2読みにすることを提案する。

なお，「米焼酎」「麦焼酎」など，「材料＋焼酎」の場合は，「芋焼酎」の読みと同様に「①～ジョーチュー②～ショーチュー」としたい。ただし，「作り方＋焼酎」や「本格焼酎」は，辞書には「～ショーチュー」をとるものもある。専門語としても「～ショーチュー」であることが多い。「材料＋焼酎」とは読みの慣用が違うのかもしれない。この点については，今後も検討を続ける。

また，立場や場面によって読みが異なったり，地域によって読みの慣用が異なったりする場合がある。実際に，地域団体商標で登録のあるものはいずれも非連濁形で読みがつけられている。地域での読みや専門家・当事者が使う読みが決まっている場合には，その読みに合わせることとする。

参考

①調査

平成21（2009）年度語形のゆれに関する調査
（平成22年2月5日～14日・エリアサンプリング・有効回答数：1,272人）

「いも焼酎を飲む」
イモショーチュー：28%，イモジョーチュー：71%
このことばを知らない・わからない：1%

②用語の決定　なし

③『アクセント辞典』の掲載
昭和18年版，26年版：　イモショーチュー
昭和41年版～：イモショーチュー
イモジョーチュー

④国語辞典掲載の変遷

	大正以前	昭和（戦前）	昭和（戦後）	平成
ショ	3（3）	6（6）	1（1）	2（0）
ジョ	0	1（1）	3（3）	7（6）

＊（　）外は，語が何かしらの形で載っている辞書の数。
（　）内は，主見出しにとっている辞書の数

⑤専門語としての扱い
・「地域団体商標」（特許庁）
大分麦焼酎（おおいたむぎ**しょうちゅう**）
大分むぎ焼酎（おおいたむぎ**しょうちゅう**）
奄美黒糖焼酎（あまみこくとう**しょうちゅう**）
球磨焼酎（くま**しょうちゅう**）
博多焼酎（はかた**しょうちゅう**）
宮崎の本格焼酎（みやざきのほんかく**しょうちゅう**）

⑥インターネット検索（goo による検索）
いもしょうちゅう（「芋焼酎」を含む，「いもじょうちゅう」を除く）：　309 件
いもじょうちゅう（「芋焼酎」を含む，「いもしょうちゅう」を除く）：　144 件

2.「奥深い」の読み

変更案
① オクフカイ　② オクブカイ
（これまで　◯オクフカイ）

変更理由
「奥深い」のような「結合形容詞」は，多く連濁する傾向にある（『新明解日本語アクセント辞典』三省堂・平13）。しかし必ず連濁するというような単純なものではない。「奥深い」も国語辞典の掲載から考えると，古くから「～ブカイ」「～フカイ」両方の読みがあり，ゆれがある語で，どちらが古い読みとも言い切れない。

アナウンサーからは「オクブカイ」の読みを追加してはどうか，という要望があった。調査の結果「オクブカイ」という読みが8割を超えている。各年代を通して「オクブカイ」が多い。

平成になって発行された辞書を16冊調べたところ，そのうち「～フカイ」を主見出しにしているものが8冊（内，1冊は「～ブカイ」も同等に主見出しにしている），「～ブカイ」を主見出しにしているものは9冊である。「～フカイ」を主見出しにしている場合は「～ブカイ」の読みも示しているが，「～ブカイ」を主見出しにしている辞書の中には，「～フカイ」の読みを示していないものもある。

「オクブカイ」を第1読みにすることも検討できるところだが，新たな読みを加える場合には，まずは第2読みとすることが多い。調査の結果，60歳以上で「オクフカイ」と読む人がほかの年代よりも多い。また，「奥深い」の意味によって読みの使い分けもありうる。以上の理由で提案としては，「オクフカイ」を第1読み，「オクブカイ」を第2読みとする。

提案に合わせて「『深遠な』という意味の場合は『～ブカイ』と読まれることが多い」という注意書きを入れることも検討したい。「奥深い」には2つの意味がある。「奥深い森」などのように，「奥まっている」という意味と，「奥深い作品」などのように，「深遠な」という意味である。「奥まっている」という意味の場合は「～フカイ」，「深遠な」という意味の場合は「～ブカイ」と読まれる傾向があるのではないか。

参考
①調査
平成23（2011）年度ことばのゆれ調査
（平成23年11月3日～20日・住民基本台帳・有効回答数：1,365人）
「奥深い作品」
オクフカイ：15%，オクブカイ：84%，
このことばを知らない・わからない：0%

②用語の決定　なし

③『アクセント辞典』の掲載
昭和18年版～：オクフカイ
（「オクブカイ」を認めたことがない）

④国語辞典掲載の変遷

	大正以前	昭和（戦前）	昭和（戦後）	平成
フ	9（8）	7（6）	6（5）	10（8）
ブ	15（14）	7（7）	8（4）	16（9）

「～フカイ／～ブカイ」でゆれがあり，どちらが主流とも言いにくい

⑤インターネット検索（gooによる検索）
おくふかい（「奥深い」を含む，「おくぶかい」を除く）：77件
おくぶかい（「奥深い」を含む，「おくふかい」を除く）：49件

3.「返り咲く」の読み

変更案

① カエリザク　② カエリサク
（これまで　◯カエリザク　◯カエリサク）

変更理由

動詞と動詞が複合してできた語（「追いかける」「聞き込む」「積み重ねる」など）は普通，連濁しない（『アクセント辞典』付録「共通語の発音で注意すること」）。このことから考えれば「カエリサク」となる。しかし，調査の結果，「～ザク」が8割以上である。年代があがると「～サク」がやや増えるものの，各年代で「～ザク」が多い。また，ネット検索でも「カエリサク」（「かえりさく」で検索）の形は少ない。

伝統的には，名詞「返り咲き」は「カエリザキ」と連濁するが，動詞の場合は連濁しない語である。しかし，こうした語の中には，動詞も連濁形に変化してきているものがある（たとえば，「キ**カ゜**エ」「キ**カ**エル」→「キ**カ゜**エ」「キ**カ゜**エル」）。

国語辞典でも，「カエリザク」の立項が多いことから，第1読みとして「カエリザク」をとることを提案する。「カエリサク」という読みもまったく選ばれていないわけではないことから，「～サク」も第2読みとして残す。

参考

①調査
平成23（2011）年度ことばのゆれ調査
（平成23年11月3日～20日・住民基本台帳・有効回答数：1,365人）
「トップに返り咲く」
カエリサク：15%，カエリザク：85%，
このことばを知らない・わからない：1%

②用語の決定　なし

③『アクセント辞典』の掲載
昭和18年版：掲載なし
昭和26年版：①カエリサク　②カエリザク
昭和41年版：①カエリザク　②カエリサク
昭和60年版～：◯カエリザク　◯カエリサク

④国語辞典掲載の変遷

	大正以前	昭和（戦前）	昭和（戦後）	平成
サ	1（1）	3（3）	4（1）	3（0）
ザ	0	0	6（4）	15（11）

⑤インターネット検索（gooによる検索）
かえりさく（「返り咲く」含む，「かえりざく」除く）：0件
（「かえりさく」単独の場合：4件／「返りさく」の場合：6件）
かえりざく（「返り咲く」含む，「かえりさく」除く）：40件
（「かえりざく」単独の場合：1万8,000件／「返りざく」の場合：26件）

4.「河川敷」の読み

確認

これまでどおり
◯カセンシキ　◯カセンジキ

「確認」とする理由

国語辞典には戦後から掲載されるようになった語であり，土木工学，建築などの専門語として使われはじめた。なお，法律用語では，旧河川法（昭和39年廃止）に「河川敷地」「廃川敷地」などの語が見られる。

調査の結果では「カセンジキ」が多い。年代による差は見られるが，各年代で「～ジキ」が多い。また，学術用語では「カセンジキ」という読みをとっている。一方，「～シキ」の読みをとっているのは，国語辞典である。「～ジキ」の読みだけをとる辞書も出始めているが，まだ「～シキ」の読みだけをとる辞書のほうが多い。

公共の施設の名称として「河川敷」という語をいれている場合，読みは「～ジキ」「～シキ」両方があり，実際はゆれがある。

放送で使う場合，どちらの読みも出てくると考えられるため，「◯カセンシキ　◯カセンジキ」のままとする。

参考

①調査
平成23（2011）年度ことばのゆれ調査
（平成23年11月3日～20日・住民基本台帳・有効回答数：1,365人）
「河川敷を歩く」
カセンシキ：25%，カセンジキ：74%，
このことばを知らない・わからない：1%

②用語の決定

●第579回放送用語委員会（昭40.6.10）

放送では原則「かわら（川原・河原）」と言いかえることにする。ただし，法律の条文など厳密な表現をしなければならない場合は「河川敷き」とし，〔カセンシキ〕と読む。しかし，〔カセンジキ〕と読んでも誤りではない。

●第950回放送用語委員会（昭57.9.9）

「河川敷」はそのまま使ってよい。なお，読みは「カセンシキ」「カセンジキ」の両様を認める。表記は「河川敷」（特例として送りがなは省く）。

③『アクセント辞典』の掲載

昭和18年版～昭和41年版：立項なし

昭和60年版～：◯カセンシキ　◯カセンジキ

④国語辞典掲載の変遷

	大正以前	昭和（戦前）	昭和（戦後）	平成
シ	0	0	6（6）	14（14）
ジ	0	0	1（0）	6（2）

⑤専門語としての扱い

『学術用語集（建築学編）』（平2）

kasenziki　河川敷

『学術用語集（土木工学編）』（平3）

kasenziki　河川敷

『有斐閣　法律用語辞典　第4版』（平24）

かせんしき（じき）【河川敷き】：

河岸の敷地。法令用語ではないが，河川法によって河川の一部とされた河岸の土地の意味で用いられる場合もある。

⑥インターネット検索（gooによる検索）

かせんしき（「河川敷」を含む，「かせんじき」を除く）：288件

かせんじき（「河川敷」を含む，「かせんしき」を除く）：481件

5.「過払い」「未払い」の読み

新立項　過払い　◯カバライ

（これまで『アクセント辞典』に立項なし）

変更案　未払い　①ミハライ　②ミバライ

（これまで　◯ミハライ）

変更理由

「～払い」の語は「不払い」のように「～バライ」としか読まない語と，「未払い」のように伝統的には「～ハライ」と読む語とがあり，読みが統一されているわけではない。

●「過払い」について

「過払い」は現在，『アクセント辞典』に立項はない。最近の国語辞典では「カバライ」で立項されているものが多いが，戦後（昭和）発行の辞書の中には「カハライ」を主見出しにするものも見られるなど，ゆれがある。調査の結果では，「カバライ」が9割にのぼった。『アクセント辞典』に新たに載せるのであれば，現在の使われ方に合わせて「カバライ」の読みだけとすることを提案する。

●「未払い」について

『アクセント辞典』では伝統的な読みから「ミハライ」の読みをとっているが，「ミバライ」という読みを認めてはどうか，という指摘が寄せられることがある。たしかに「～払い」の語は，「～バライ」と読む語が多く，「～ハライ」と非連濁形で読む語は少ない。調査の結果でも「ミバライ」が多い結果になった。「～払い」の語は，連濁形になってきているということのようだ。

調査の結果を踏まえて，新しい読みである「ミバライ」を第2読みとして追加することを提案する。

参考

①調査

平成21（2009）年度語形のゆれに関する調査

（平成22年2月5日～14日・エリアサンプリング・有効回答数：1,272人）

「保険料の過払い」

カハライ：6%，カバライ：90%，

このことばを知らない・わからない：4%

平成18（2006）年度ことばのゆれ調査

（平成19年3月9日～12日・住民基本台帳・有効回答数：1,307人）

「保険金の未払い」

ミハライ：30%，ミバライ：68%，

わからない：1%

②用語の決定　なし

③『アクセント辞典』の掲載

昭和18年版～：ミハライ

④国語辞典掲載の変遷

過払い	大正以前	昭和（戦前）	昭和（戦後）	平成
ハ	0	0	4（4）	9（6）
バ	1（1）	0	4（3）	13（10）

未払い	大正以前	昭和（戦前）	昭和（戦後）	平成
ハ	3（3）	8（8）	10（10）	15（15）
バ	0	0	0	3（1）

⑤インターネット検索（goo による検索）
かはらい（「過払い」を含む。「かばらい」を除く）：1件
かばらい（「過払い」を含む。「かはらい」を除く）：32万8,000件
みはらい（「未払い」を含む。「みばらい」を除く）：100件
みばらい（「未払い」を含む。「みはらい」を除く）：59件

6.「過不足」の読み

確認

これまでどおり「カフソク」

「確認」とする理由

「過不足」については，アナウンサーから「カブソク」の読みを追加してはどうか，という意見が出されている。調査の結果も「カブソク」という読みが多い。しかし，国語辞典では「カフソク」の立項しか見られない。たとえば，「山川」が「山と川」で並列関係にある語で連濁しないように，「過不足」も「過」と「不足」が並列関係にある。そのため「カフソク」が伝統的な読みである。

調査の結果を見ると連濁化してきている語ではあるが，語構成と国語辞典の立項を重視して，放送で使う語としては，これまでどおり「カフソク」のみとし，連濁形「カブソク」は認めないこととする。

参考

①調査

平成22（2010）年度ことばのゆれ調査
（平成23年1月7日～23日・住民基本台帳・有効回答数：1,323人）

「**過不足なく説明する**」
カフソク：28%，カブソク：71%，
このことばを知らない・わからない：2%

②用語の決定　なし

③『アクセント辞典』の掲載

昭和18年版～：カフソク
（「カブソク」を認めたことがない）

④国語辞典掲載の変遷

	大正以前	昭和（戦前）	昭和（戦後）	平成
フ	13（13）	10（6）	9（9）	16（16）
ブ	0	0	0	0

⑤インターネット検索（goo による検索）
かふそく（「過不足」を含む。「かぶそく」を除く）：92件
かぶそく（「過不足」を含む。「かふそく」を除く）：172件

7.「高利貸し」の読み

変更案

① コーリガシ　② コーリカシ
（これまで　◯コーリカシ）

変更理由

「高利貸し」は「コーリカシ」が伝統的な読みである。この語は「高利で貸すこと」または「高利で貸す人」を意味する語だが，「～する人」を表す場合は連濁しにくい（参照：『放送研究と調査』平24年12月号）。

しかし，国語辞典では，「コーリカシ」「コーリガシ」でゆれがあり，必ずしも「～カシ」であるわけではない。

「高利貸し」という言い方はやや古い言い方のようにも感じられるが，ニュース原稿では，行為を指す「高利貸し」の使用がいくつか見られる。現代でも使われている語であることから，新しい読みである「～ガシ」を第1読みとする。

なお，『アクセント辞典』で「～カシ」と連濁しない形で掲載されている語に「金貸し」もあるが，この語については「カネカシ」のままとする。「高利貸し」同様，「金を貸す人」の意味で使われる語であり，この語については「カネガシ」という語形はあまり見られないためである。

参考

①調査

平成23（2011）年度ことばのゆれ調査
（平成23年11月3日～20日・住民基本台帳・有効回答数：1,365人）

「**悪徳の高利貸し**」
コーリカシ：15%，コーリガシ：84%，
このことばを知らない・わからない：1%

②用語の決定
第561回放送用語委員会（昭39.8.13）
◯コーリカシ　×コーリカ゛シ
③『アクセント辞典』の掲載
昭和18年版：コーリカ゛シ
昭和26年版～：コーリカシ
④国語辞典掲載の変遷

	大正以前	昭和（戦前）	昭和（戦後）	平成
カ	12（11）	5（4）	4（2）	13（6）
ガ	4（3）	9（8）	8（7）	14（9）

⑤インターネット検索（gooによる検索）
こうりかし（「高利貸し」を含む,「こうりがし」を除く）：8件
こうりがし（「高利貸し」を含む,「こうりかし」を除く）：79件

8.「凍え死ぬ」の読み

変更案
① ココ゛エシヌ　② ココ゛エジヌ
（これまで　◯ココ゛エシヌ）
なお,「凍え死に」は「ココ゛エジニ」のままとする。

変更理由
名詞は連濁するが，動詞は連濁しない語の1つである。「動詞＋動詞」の複合動詞は濁音化しないというのが一般的な規則のため，伝統的には「コゴエシヌ」である（議題「3.返り咲く」と同様の問題）。
調査の結果，「コゴエジヌ」に変化してきている。高年層には「コゴエシヌ」がまだ多く選ばれている。
アナウンサーからは「～ジヌ」の語形を追加する要望が出ている。伝統的には「～シヌ」であり，高年層にも「～シヌ」が選ばれていることから，「コゴエシヌ」を第1読みとし，新しい読みである「～ジヌ」を第2読みとして追加することを提案する。

参考
①調査
平成21（2009）年度語形のゆれに関する調査
（平成22年2月5日～14日・エリアサンプリング・有効回答数：1,272人）
「このまま凍え死ぬのはいやだ」
コゴエシヌ：45%，コゴエジヌ：54%，
このことばを知らない・わからない：1%
②用語の決定　なし
③『アクセント辞典』の掲載
昭和18年版～昭和41年版：掲載なし
昭和60年版～：ココ゛エシヌ
④国語辞典掲載の変遷

	大正以前	昭和（戦前）	昭和（戦後）	平成
シ	1（1）	1（1）	2（2）	9（8）
ジ	14（13）	9（9）	8（8）	11（10）

⑤インターネット検索（gooによる検索）
こごえしぬ
（「凍え死ぬ」を含む,「こごえじぬ」を除く）：21件
こごえじぬ
（「凍え死ぬ」を含む,「こごえしぬ」を除く）：6件

9.「税引き」の読み

変更案
◯ゼービキ　（これまで　◯ゼーヒキ）

変更理由
「税引き」は，「名詞＋動詞連用形」の語であり，「税」を「引くこと」という目的格の関係にある。こうした語は連濁しにくいと言われており，伝統的には「ゼーヒキ」となる（参照：『放送研究と調査』平24年12月号）。
調査の結果，年代差なく「ゼービキ」と連濁する形が多い。国語辞典でも，平成以降に発行された辞書で調べた16冊のうち，12冊で立項があり，「ゼーヒキ」を主見出しにしているのは1冊だけである。また「ゼービキ」の項目に説明として「ゼーヒキ」の読みも入れている辞書は4冊。ほとんどが「ゼービキ」単独での立項である。
ニュースでも使われる語である。読みは不明だが，多くの場合は「税引き前」「税引き後」「税引き前利益」など複合した形で使われている。アナウンサーに行ったアクセント調査では，連濁形を追加してはどうか，という意見が聞かれた。
調査の結果および国語辞典の立項状況などから考えて，読みを「ゼービキ」のみとすることを提案する。
なお，新しい『アクセント辞典』では，読み方で注意が必要な語には，使わない読みを「×」で示すことを検討している（たとえば「イチダンラク　×ヒトダンラク」）。すべての語に「×」をつけることは

考えていないが，どこまで「×」をつけるのかは今後検討が必要である。「税引き」の場合，「×ゼーヒキ」と表示することについての意見もうかがいたい。

参考

①調査

平成23（2011）年度ことばのゆれ調査

（平成23年11月3日～20日・住民基本台帳・有効回答数：1,365人）

「税引き前の価格」

ゼーヒキ：10%，ゼービキ：89%，

このことばを知らない・わからない：1%

②用語の決定　なし

③『アクセント辞典』の掲載

昭和18年版：掲載なし

昭和26年版～：ゼーヒキ

④国語辞典掲載の変遷

	大正以前	昭和（戦前）	昭和（戦後）	平成
ヒ	0	0	3（3）	5（1）
ビ	0	0	2（1）	12（11）

⑤インターネット検索（goo による検索）

ぜいひき（「税引き」を含み，「ぜいびき」を除く）：2件

ぜいびき（「税引き」を含み，「ぜいひき」を除く）：180件

10.「庭作り」の読み

一部変更

読みはこれまでどおり

◯ニワツクリ　◯ニワズクリ

意味によっては「～ツクリ」の読みだけの場合もあるため，次の説明を加える。

「庭師」の意味の場合は「ニワツクリ」

一部変更とする理由

「名詞＋動詞連用形」の複合語で，前部が後部に対する目的格のものは連濁を起こしにくい。中でも「～する人」の意味のときや，「～を…すること」の意味で作業，仕事，遊びなどを示す場合は連濁が生じにくい傾向がある（参照：『放送研究と調査』平22年11月号）。

「庭作り」の場合，「庭師」の意味と「庭を作ること」の意味があるが，どちらの意味の場合も連濁しないのが伝統的な形である。

調査では，「庭師」の意味の場合と，「庭を作ること」の意味の場合と2つの場面について「庭作り」の読みを聞いた。いずれの場面でも連濁形が多い結果になった。一方，昭和以降に出版された国語辞典では，「ニワヅクリ」の読みを見出しにとっていない。辞書には，「庭師」と「庭を作ること」の意味が含まれており，読み分けはされていない。

最近は，「自分好みの庭を作る」という意味で「庭作り」ということばが使われる。

調査の結果と国語辞典の掲載内容が，正反対の結果になっており，「～ツクリ」「～ヅクリ」どちらを第1読みにするか，判断がつきにくい。現在，現実にはあまり使われることがない「庭師」という意味の場合の「庭作り」は伝統的な「ニワツクリ」だけにし，それ以外は，「◯ニワツクリ◯ニワズクリ」のままにする。

参考

①調査

平成21（2009）年度語形のゆれに関する調査

（平成22年2月5日～14日・エリアサンプリング・有効回答数：1,272人）

「庭師のことを庭作りとも言う」

ニワツクリ：17%，ニワヅクリ：79%，

このことばを知らない・わからない：4%

「自己流で庭作りをする」

ニワツクリ：13%，ニワヅクリ：87%，

このことばを知らない・わからない：1%

②用語の決定　なし

③『アクセント辞典』の掲載

昭和18年版，昭和26年版：掲載なし

昭和41年版～：◯ニワツクリ　◯ニワズクリ

④国語辞典掲載の変遷（資料②）

	大正以前	昭和（戦前）	昭和（戦後）	平成
ツ	18（17）	9（9）	9（9）	13（13）
ヅ	3（1）	0	0	1（1）

＊調べた辞書の中で平成以降に「ニワヅクリ」を主見出しにしているのは1冊。和英辞典である。

⑤インターネット検索（goo による検索）

にわつくり（「庭作り」を含む，「にわづくり」を除く）：32件

にわづくり（「庭作り」を含む，「にわつくり」を除く）：242件

11.「見え隠れ」の読み

変更案

◯ミエカクレ　（これまで　◯ミエガ゜クレ）

新立項

◯ミエガ゜クレニ

（これまで『アクセント辞典』に立項なし）

変更理由

「見る」ことと「隠れる」ことをあらわす複合語であると考えれば，連濁の原則から「ミエカクレ」と非連濁形になると考えられる。しかし，この語には「ミエガクレニ」という副詞での使い方が古くからあり，「見える状態と隠れる状態が繰り返される様子」をあらわす。そのため「ミエガクレ」と連濁するのが伝統的なようだ（参照：『放送研究と調査』平23年11月号）。『アクセント辞典』でも一貫して「ミエガ゜クレ」をとってきた。

しかし，調査の結果，非連濁形が圧倒的な結果になった。アナウンサーからの指摘では，「ミエカクレ」を認めることと，「ミエガクレ」の読みがあるのかどうかという疑問の声が聞かれた。

こうしたことから，放送では「ミエカクレ」という読みをとることとしたい。ただし，古典の作品などで「ミエガクレ」と読む場合もある。その場合は，ほとんどが「ミエガクレニ」という形である。新しい『アクセント辞典』では「ミエガ゜クレニ」も別に立項し，連濁の読みがあることも示してはどうだろうか。たとえば，多くの国語辞典の用例に示されている「見え隠れにあとをつける」の場合は，「ミエガ゜クレニ」と読むことになる。

参考

①調査

平成22（2010）年度ことばのゆれ調査

（平成23年1月7日～23日・住民基本台帳・有効回答数：1,323人）

「人の姿が見え隠れする」

ミエカクレ：91%，　ミエガクレ：8%，

このことばを知らない・わからない：1%

②用語の決定　なし

③『アクセント辞典』の掲載

昭和18年版～：ミエガ゜クレ

（「ミエカクレ」を認めたことがない）

④国語辞典掲載の変遷

	大正以前	昭和（戦前）	昭和（戦後）	平成
カ	0	1（1）	2（0）	12（6）
ガ	18（18）	13（13）	10（10）	15（11）

⑤インターネット検索（goo による検索）

みえかくれ

（「見え隠れ」を含む，「みえがくれ」を除く）：104件

みえがくれ

（「見え隠れ」を含む，「みえかくれ」を除く）：44件

12.「紫水晶」の読み

変更案

① ムラサキズイショー　② ムラサキスイショー

（これまで　◯ムラサキズイショー）

変更理由

「～水晶」の複合語は，『アクセント辞典』では「～ズイショー」と連濁形を主にとってきている。国語辞典でも同様である。連濁形が伝統的であると考えられる。ところが，調査の結果では，非連濁形の「ムラサキスイショー」が多い結果になった。年代による差もやや見られる。宝石などの名称の多くは外来語に変化してきている。「紫水晶」も「アメジスト（一部では「アメシスト」とも）」と言われる場面が多くなってきている。「～水晶」という語へのなじみが薄くなったことにより，非連濁形が出始めているとも考えられる（参照：『放送研究と調査』平22年11月号）。

放送で使う場合には，伝統的な連濁形を第1読みとして残すが，新しい読みである非連濁形も第2読みとして加えることとしたい。

参考

①調査

平成21（2009）年度語形のゆれに関する調査

（平成22年2月5日～14日・エリアサンプリング・有効回答数：1,272人）

「宝石のアメジストは，紫水晶とも言う」

ムラサキスイショー：79%，

ムラサキズイショー：18%，

このことばを知らない・わからない：3%

②用語の決定　なし

③『アクセント辞典』の掲載

昭和18年版，昭和26年版：掲載なし

昭和41年版～：◯ムラサキズイショー

④国語辞典掲載の変遷

	大正以前	昭和（戦前）	昭和（戦後）	平成
ス	1（1）	1（1）	0	0
ズ	6（6）	8（8）	4（4）	10（10）

⑤専門語の扱い

『岩石鉱物辞典』（風間書房・昭41）
　murasaki-zuisho　紫水晶
　kemuri-zuisho　煙水晶
『学術用語集（地学編）』（昭59）
　ムラサキスイショウ　murasaki-suisyo
　紫水晶　murasaki-suisyo
　ケムリスイショウ　kemuri-suishyo
　煙水晶　kemuri-suisyo

⑥インターネット検索（goo による検索）

むらさきすいしょう
（「紫水晶」を含む，「むらさきずいしょう」を除く）：836件
むらさきずいしょう
（「紫水晶」を含む，「むらさきすいしょう」を除く）：608件

●意見（全体について）

町田健委員：基本的に提案のとおりでよい。原則で考えておいて，実際の用例や使用実態（調査）を見て納得する，というふうに考えればいいのではないか。「連濁」は1つのまとまった単語になっているということを示すためには大変便利なものである。1語として結びつきやすいかということを基準として考えればよい。

清水義範委員：清音どうしの語を2つ並べておくと濁音になる傾向がある。しかし，こうした現象はお年寄りほどイヤだと思うものだ。50年ぐらい前の谷崎潤一郎のエッセーの中に，「ほとんどの人がそういうことばを参考にしてしまうのでわたしはイヤだ」という一文がある[1)]。その中で，「さすが三島由紀夫は「潮騒」を「シオザイ」としないで「シオサイ」と読ませている。」と書かれている。「なんでも濁音にしてしまうのがイヤだ」と感じることもある。しかし，だんだんなっていってしまう。今回の提案は，調査の結果を見て，適宜時期を見て「連濁」にしようということだろう。そういう傾向にあるのは確かで，それはしょうがないことだと思う。もともとは濁っていないと言っても，現実に合わなくなる。

天野祐吉委員：どっちのことばを使ってもいいように思う。議題を見ると中にはあえて調査で大きい数値をとっているものを採用せず，劣勢のものを取り上げているものがある。その根拠がもうひとつよくわからない。世論調査で勝っているほうを必ずしも採用していない。そこにNHKのことばに対する考え方の哲学というか，基本方針というか，そういうものが「みえかくれ」する。世論調査の数値に依存するのであれば，すべてそのとおりにすればよいだろう。そうではなく「濁音はなるべく使わない」ということを日本語としては原則にしようじゃないか，というのがNHKの日本語に対する哲学としてあるのであれば，原則として全部濁音のついていないものを①にして，濁音がつく場合もある，あるいは，濁音をつけてもいいというのを②にするというふうにしたほうが，NHKの考え方が出るのではないか。NHKの考え方でやっているのか，世の中の反応でやっているのか，どっちつかずというところが，どうも変だなという感じがする。どっちつかずの提案で議論するのであれば，一語一語について徹底的に議論しなければいけない。

事務局：これまで『アクセント辞典』に掲載がなかった語は「新築」と考え，いちばん新しいデータをもとにした読みを優先させる。それに対して『アクセント辞典』にすでに掲載のある語で，そこに新しい読みを採用する場合は「リフォーム」と考え，調査結果で多く選ばれている新しい読みを第2読みとして付け加えるようにした。ただし，それも語によって特性が異なるため，判断が違うこともある。

井上史雄委員：今回の提案では実際の調査の多数派を無視しているものがある。一方，「アクセント」を変更する場合はどうだろうか。「アクセント委員会」の話し合いでは，アクセントの場合は，東京出身者やアナウンサーの調査を行い，多数派を採用するということになっている[2)]。何パーセント以上の場合は採用するなどの合意はなかったと思う。「アクセント」と「発音」は違うのかというと，音声で届けて，相手に理解させるということでいえば，NHKのアナウンサーにとっては同じである。視聴者が使っている語と食い違うと違和感を覚える人もいるだろう。事務局は，アクセントの多数派採用と，連濁における多数派採用は一致させるということを考えているのだろうか。文法的な現象は，放送で使うのか

そうでないのかで「場」を意識することがある。語形でも改まった言い方とそうでない言い方とがある。しかし，発音やアクセントでは「場」はほとんど意識しない。「連濁」についてもそれほど「場」を意識しないのではないか。今回は，アナウンサーが指摘した語について調査をし，提案をしている。アナウンサーの指摘している読みは，調査で多数派になっており，さすがアナウンサーだと思える。アナウンサーは保守的ではあるが，人々がどう言っているのかアンテナをはって意識しているのだろう。アナウンサーが一般向けにどう発音したらいいと意識しているのかをたずねる調査もあるようだ。「表音一致」が全員に支持されるわけではない。いずれにしろ，この世論調査の結果はかなり信頼できると思う。世論調査でこれだけの人が採用している読みであれば，2つの読みを並列させるか，少なくとも落とすことはしないほうがいい。順番も場合によっては入れ替えてもいい。「連濁」の調査の結果を見ると，「多数派への類推」あるいは「新たな規則性の創造」と言えるように思う。議題で見ると2つの言い方があってたいへんだと考えるかもしれないが，実際の調査結果の数値はかなり離れているものが多い。つまりあっという間に変化してしまうのではないかと思う。「変化のS字カーブ」という考え方がある。最初はゆっくり進み，ある程度進むとあっという間に広がる。「連濁」の変化も同様で，若い人が採用しているものはこれからも採用が進むのではないか。放送用語は一般から半歩遅れるという方針をとっており，多数派を①にするか②にするかは別問題だが，多数派を入れることについては問題ないと思う。

事務局：提案に示した調査は標準的な日本人に対して行ったものである。一方，アクセントはNHKアナウンサーに調査をした。NHKのアナウンサーは，もともと日本語の発音とアクセントに保守的な層である。また，調査では「放送ではあなたはどう言いますか」と聞いており，「普段のあなたのアクセントはどうですか」とは聞いていない。保守的な結果が出ていると考えられ，60%の人がこうすると答えたのであれば，放送のことばとして使っても問題ないと考える。しかし，語形・発音の調査は「あなたはどう言いますか」と一般の人に聞いている。放送で使うことばを考える場合には，保守的なほうに判断した。

野村雅昭委員：用語委員会で「ことばのゆれ」が問題になる場合にはいろいろなケースがある。ことばの意味の変化や文法的な問題は，「なぜそうなのか」ということの説明が一応はつく。ところが，「発音」の中でも，今回取り上げられている「連濁」は説明がつかないものが多い。500～600年前までは，今よりは強い法則性があったが，今は大原則しか残っていない。個々の語については法則性の対象にならない。今回提案されている語は，「これは原則に違反するからだめだ」とか「原則に基づいてこれをとろう」とかいうことはほとんどない。せいぜい「過不足」と「見え隠れ」のような並立的なもの，あるいは対立的なものは連濁させないというのは，今まで歴史的な流れがあるだけである。また現実に，世論調査でこれだけ多数の人が伝統的でない言い方を支持しているという結果が出ている。研究者としては，提案すべてを認めざるを得ない。しかし，一個人としては反対なものが多い。なぜ反対なのか言えないものがかなりある。

荻野綱男委員：今回の問題はどう考えるべきか悩ましい問題である。「連濁」は，日本語学の分野の論文もあり，研究がなされてきた。しかし，きれいに説明できるわけではない。「連濁」はもともと規則的だったのだろうが，最近はそうでもない。結局は語彙的なもの，一語一語によって連濁したりしなかったりする傾向が強まってきた。規則性でとらえることが難しくなってきた。ここで議論しているように，この単語はどうするのかということを一語一語考えて，決めていくしかないだろう。規則にあてはめて考えていくのは，かえって違和感をひろげていってしまうような気がする。今回のような議論のしかたのほうが望ましい。議題を見て，とてもおもしろいと思った。「国語辞典」「調査」「ネット」の3つの媒体での扱いを調べており，それぞれの媒体がどういう性質のものなのかを浮き彫りにしている。それらを総合的に考えて，一語一語について検討するという態度はたいへん好ましい。その中で国語辞典が古すぎるという感じを持った。国語辞典は「今」使われている語を反映させればいいというものではない。国語辞典によっても異なるが国語辞典の場合「現代語」のとらえ方が違う。「現代語」というと戦後ぐらいからを指す場合もあるし，小学生の学習を考えると明治期までさかのぼって「現代語」ととらえてもいい。夏目漱石の作品が小学校の

教科書に出てくる。その作品に出てくる知らない単語を子どもたちが国語辞典でひいて調べることがある。国語辞典に載っていないと読めないことになり，そういった語や読みを削除するわけにはいかない。「今生きている日本語」の反映ではなく，場合によっては明治ごろまでの少し古い語までをカバーしているのが国語辞典である。ではNHKの放送はどうするのか。放送で使うというのは「現代語中の現代語」で「今」を反映している。放送している時点でちゃんと聞いてわかるように視聴者に届けなければならない。つまり昔の日本語をあらわす必要がない。「今」わかるということが最大の考えるべきポイントである。国語辞典に即して考えると古くなりすぎてしまうのではないか。そういうことから考えると調査のデータを尊重していいと思う。またネットも現代語を反映させている。「調査」と「ネット」が「今」の日本人が使っていることばであり，これに即して考えるのが望ましいだろう。こうしたことを念頭において，語ごとに見ていくと，調査の結果を基準に提案が考えられている。基本的には提案どおりでいいと思う。

井上由美子委員：原則的に「現代の使い方」にしたがって，ゆれや違いがあるものは除外していくという方針で賛成である。だんだんと濁音が多くなるという印象は受ける。

青木奈緒委員：NHKのアナウンサーに聞いてみることも必要だろう。前回の用語委員会で「精霊流し」の読みについて議論をした[3)]。ニュースでは「精霊流し」を使わず，「灯籠流し」と言いかえていたようだ。「灯籠流し」でよいのであれば「精霊流し」の読みを議論しないで「灯籠流し」とすればいいのではないかと思う。現場と用語委員会での意識の差があるようだ。まずは現場でどうしているのかを調べてはどうだろうか。

（語ごとの意見）

町田健委員：「芋焼酎」は種類であり，一般化している。連濁形を優先させるのは当然だろう。「本格焼酎」や「大分麦焼酎」は固有名詞であり，2つの語が結合しているということが意識されるため連濁しない。一方，材料をあらわすような場合は結びついているので連濁するという原則でよいだろう。「奥深い」は「奥が深い」と「が」を入れても意味が変わらず，「奥」と「深い」の間に境界があると考えられる。そのため「オクフカイ」となる。しかし「深遠な」という意味の場合は「奥」と「深い」の2つの単語の意味を組み合わせて「深遠な」という意味が自動的に出てくるわけではない。「奥」と「深い」が結びついて別の意味をあらわしており，密接に結びついている。そのため「オクブカイ」となる。意味が違えば読みも違う。「返り咲く」も同じだ。「カエリサク」だと事柄が時間的に連続している意味になり，「かえってきて咲く」という意味になってしまいそうだ。ところが複合語としての意味は，実際に何かが咲くわけではない。こうしたことから考えて「カエリザク」という読みを優先させていいだろう。「河川敷」は，自分では「カセンジキ」と言っている。「敷」は単独ではあまり使われない。「下敷き」など複合語の1つとして使われ，独立性がない。独立性がないことを示すのが連濁であると考えれば「カセンジキ」が優先されるのだろう。「過払い」と「未払い」は，「カバライ」「ミハライ」でいいだろう。「過払い」は調査の結果で「カバライ」が圧倒的に多い。また日本語の「ハ行転呼」の歴史から考えても「カハ」は言いにくい。「過不足」は「過」と「不足」という2つの意味的な要素が独立して並立しているので，これは連濁する必要はない。「高利貸し」は「高利で貸す」こと全体を指すのではなく，それを職業としている人というように意味が限定されてくるので，一語としてのつながりが緊密である。日本語の連濁の原則から考えると「コーリカ゛シ」のほうがいいと思う。「凍え死ぬ」も「凍える＋死ぬ」（凍えて死ぬ）であり，2つの要素がきちんと明確に区別できるので連濁をしないというのが原則だ。「税引き」は一体化がどれくらい進んでいるのかわからない。ただ，調査の結果を見て「ゼービキ」でいい。「庭作り」は，原則どおりにはならないかもしれない。「庭を作ること」という場合は「ニワズクリ」で，「庭を作る人」という意味の場合は，「ニワツクリ」で，わかりやすいと思う。「見え隠れ」は「見える」と「隠れる」が両方独立しているので，連濁をしないほうがいい。「ミエガクレニ」はあまり使わないこともあり，立項しなくていいだろう。「紫水晶」についても，「紫」と「水晶」がわかれているわけではないので，連濁するということだろう。

清水義範委員：提案に異論はない。「過払い」「未払い」と「過不足」は別である。「過不足」は「過」と「不足」の別の側面のことばを並べた語で，ほかの

語と違って清音で残る。個人的な感覚でいえば「凍え死ぬ」は「コゴエシヌ」としか言わない。調査では60歳以上がそういう結果だった。ほかの「～死ぬ」の語を見ても，なぜ「凍え死ぬ」だけが「ジヌ」になるのかがぴんとこない。また，意外に思ったのは「紫水晶」は，「ムラサキスイショー」というものだと思っていた。なぜ今まで「～ズイショー」できたのだろうか。また，調査の結果「～スイショー」が多かったのに，「ズイショー」を第1読みに残すのはなぜだろう。その根拠が，自分のこの語の使用実感とずいぶんずれるので違和感がある。

天野祐吉委員：「河川敷」は第579回放送用語委員会で「河原」と言いかえることにするという決定がある。放送用語としては，「言いかえる」ということが大切なのではないかと思う。話しことばになっていないものを無理にそのまま使うというのはあまりいいことではない。テレビやラジオは話しことばのジャーナリズムなのだから，そういう点では，話しことばでもわかることばへの置き換えができれば，それを優先させることを考えてもいいのではないか。「過払い」と言われてもわからない。経理関係の人はわかるだろうし，経理関係のニュースであればなんとなくわかるが，普通「過払い」と言われても何のことだかわからない。「払いすぎ」と言ったほうがいい。耳で聞いたときにわかる・わからない，というのもひとつの基準にしていい。言いかえが可能な語については言いかえ語を考えるというのも大切だと思う。濁音がない世界で生きていた世代なので「コーリガ゜シ」などは「浜町河岸」（ハマチョーガ゜シ）のように聞こえてしまう。「コーリカシ」は清音でいいと思う。「過不足」はこれまでどおり「カフソク」にするとなっている。「カブソク」は採用していない。つまり，「カブソク」は使わないことが望ましいということになってしまう。調査のデータだと「カブソク」が多い。どうして，「カフソク」という提案になるのか。調査データだけで決めているわけではないというのはわかるが，どこらへんが決断の基準になっているのかということを聞きたい。だんだんと濁音になってきた傾向はわかる。濁音がないほうが原則なのだということをはっきり打ち出したうえで，それでも世論調査をすると濁音を使う人が多いから，濁音が入る形を第2の読みとする。そういう多少の注釈をつけて，アナウンサーなどに伝えていくというのがいちばんいいのではないか。

井上史雄委員：全体としては提案に賛成である。読まないほうの読みに「×」をつけるかどうかについては，つけないほうがいいだろう。たとえば差別的な表現には「×」をつけるべきだが，議題に例を示している「ヒトダンラク」のような読みは，差別的な表現や不快語と同じレベルだということにはならない。また，「ミエガクレニ」を新たに立項するということについては，「に」をつけたときだけ「カ゜」とするほどの違いがあるのだろうかと疑った。調査の結果から見てもそうは思えない。「ミエカクレ」と「ミエカ゜クレ」両方並べておけばすむのではないか。意味によって連濁かそうでないかの使い分けがあるのではないか，ということについては，たとえば，アクセントで「ドライバー→」と「ドラ＼イバー」は明らかに使い分けがあり，『アクセント辞典』でも記述が別になっている[4)]。しかし，若い人はどちらの意味の場合も，平板アクセントにしているようだ。ある時期に使い分けがありそうだということで，意味の使い分けをのせたが，すぐに古くなってしまう。発音についてもよっぽどでなければ，意味についてふれないほうがいい。

野村雅昭委員：「芋焼酎」は原案に賛成。「奥深い」は連濁を認める必要はない。調査の結果では圧倒的に「オクブカイ」が多くなっているが，このことばに対しては，個人的にどちらの意味であっても「オクフカイ」である。なぜそうなるのかということを考えると，個人的な感覚ではあるが，日本語は「濁音はなるべく使わない」というのが大原則である。いまさらそんなことを言ってもできないのはわかりきっているのだが，日本人の日本語に対する意識の底には「濁音を避けたい」という意識があった。しかし，最近になってほとんどそれは無視されるようになってきた。その意識がなくなってきたというのが，この調査結果なのだろう。「返り咲く」「河川敷」は原案のとおりでよい。「過払い」はその語を立項することにまだ抵抗がある。「払いすぎ」といえばいい語だと思う。それを「過払い」と言うから読みを考えなければいけなくなる。この語を使うとすれば「カハライ」では読みにくいため「カバライ」となる。もうひとつ「未払い」との問題で言えば，「払い」は和語である。「過」「未」は漢語である。「漢語＋和語」の結合した語は例外的である。「未」と和語が結合している例というのは，「未払い」のほかに「未晒し」ぐらいで，あまり使わない語である。「未払い」が

「ミバライ」になっていく原因のひとつは「不払い」という語からの類推があるだろう。「不」は「未」と同じで否定の意味を添える接辞的な漢語だが，かなり和語化している。たとえば「ふぞろいのりんごたち」というように，比較的，和語に「不」はつきやすくなっている。「不払い」の場合は「フバライ」という読みでよく使われるため，そこからの類推で「ミバライ」になっているのだろう。「過払い」「未払い」両方の語の読みをそろえるというのはあまり意味のないことである。「過払い」は濁音，「未払い」は清音でいいのではないか。「過不足」は提案のとおりでよい。「高利貸し」は，意味の問題と連濁の問題とがある。『金色夜叉』など明治時代に書かれた作品に出てくる「高利貸し」は，「コーリカシ」だろう。もし，明治時代の作品を読む必要があるのであれば，「コーリカシ」でのせておくべきだと思う。ただし，「高利で貸す」行為の意味で，現在でも使われているようだ。これは「コーリカ゜シ」でいいと思う。そうなると，1つの見出しで2つの読みを示さなければいけなくなる。ほかにもこういった語は出てくる。「庭作り」は「高利貸し」に似ているが，人の問題と行為の問題と両方ある。「庭を作る人」は「ニワツクリ」で，そうじゃない場合は，「ニワズクリ」だとまで言い切れるのかどうか。「ニワツクリ」を優先しておけばいいのではないか。現行はもうすでに2つ並べているので，変更なしであればそれでよい。「見え隠れに」と「見え隠れ」については，「見え隠れに」を新たに立項することに絶対反対である。見出しが1つ増えることになる。なるべく見出しは増やしたくない。「庭作り」の場合は1つの見出しの中で処理するということなのでいいのだが，これを別の見出しにしてしまうということは，「ミエカクレ」という言い方が現代語として独立して存在し，「ミエガクレニ」という副詞も別に存在するということを認めたことになる。まだそこまではいっていない。かなり古くから「見え隠れする」，「見え隠れに」は「ミエカ゜クレ」できた。ところが最近は，「ミエカクレ」が非常に多い。それは本当に「見える」と「隠れる」の2つのことが対比されているから清音になっているのかどうかは解釈が難しい。別見出しにするほどではなく，「ミエガクレ」を①にし，「ミエカクレ」は②であげておくぐらいでいいのかなと思う。「紫水晶」は原案どおりで問題ない。

荻野綱男委員：「奥深い」は，調査の結果「オクブカイ」が非常に多い。調査の結果を基準にすれば，これは連濁を第1の読みにしてもいいのではないか。「河川敷」は，両方の読みが「○」なのでこれでもいいのだが，やはりグラフを見ると，「カセンジキ」が多い。確かに「河原」と言えばよいのだが，固有名詞として出てきてしまうだろう。その場合には，調査のとおり連濁を優先させてもよいのではないか。両方「○」になっているのでギリギリこれでもしょうがないのかなとも思う。「過払い」「未払い」は，「過払い」は「カバライ」が多いので提案のとおりでいい。「未払い」も調査では「ミバライ」のほうが多い。提案では「①ミハライ②ミバライ」となっているが，これも逆にしてもいいのかもしれない。ただ，年齢差が比較的はっきりしていて，60歳以上になると「ミハライ」と「ミバライ」が接近してくる。やや古い読みに軸足を置いて考えると「①ミハライ②ミバライ」というのでもいいのかもしれない。「過不足」も「カブソク」が多い。「カブソク」を取り上げるということをしてもいいのかもしれない。これも若干の年齢差があるので微妙だ。いくつか問題は残るが，年代別の調査の結果を重視して考えるのがいいのではないか。「紫水晶」は，「ムラサキスイショー」を第2読みで加えているが，これは，年齢別に見ても「スイショー」が圧倒的に多くなっている。これは「ムラサキスイショー」を第1読みにしてもいいのではないか。古い作品を朗読するような場合，本当に当時の読み方にそろえるべきなのか，というのは難しい問題だ。読み，アクセントも含めて変化している。明治時代の作品は明治時代流の読みをすればいいかというと現代の人が読んでいるわけで，現代の読みでよいのではないかと思う。そういった点では「ムラサキスイショー」の読みを第1読みにしてもよいのではないか。

井上由美子委員：「カエリサク」より「カエリザク」だと思うし，「オクフカイ」より「オクブカイ」のほうがわかりやすいようにも思う。個々のことばに関しては，「芋焼酎」は提案のとおりでよい。「奥深い」も変更案に賛成だが，「深遠な」という意味の場合は「オクブカイ」になりやすい，という注意書きを入れるというのは，まだ早いようにと思う。確実なことではないし，今は「オクブカイ」を第2読みに加える形でいいのではないか。「返り咲く」「河川敷」は提案のとおりで問題ない。「過払い」ということばは消費者金融の「過払い請求」が出たときに，世の中

の人たちが飛びついたことば。思ったより世の中の人が知っていることばである。立項していいのではないか。ただ，固有名詞的な使い方が多いのではないかと思うので，「未払い」と読み方をまとめるというのには反対である。どちらかというと「カバライ」だけで立項するのでいいだろう。特殊語だと思っている。「過不足」は連濁形が間違っていることは知りつつ，個人的には「カフソク」と読むことはない。普段の生活でも「カフソク」と言っている人に会うことはない。間違っていると知りつつ，「カブソク」を加えてもいいのではないかなと思う。「見え隠れに」を立項する必要があるだろうかと思った。立項する理由がよくわからない。「コゴエジヌ」を読みにあげることに違和感がある。そんなに使うことばでもなく，調査の結果もそれほど「コゴエジヌ」が多いわけでもないので，本当に必要なのだろうか。「ムラサキズイショー」がなぜ「ムラサキスイショー」になっていったのか興味がある。

青木奈緒委員：濁音をつけるかどうかというのは今まで感覚でしかわけていなかったので，規則性があることを知らなかった。自分では「にごり」が少ないほうだ。「過不足」は「カフソク」としか言ったことがない。「河川敷」についても個人的には「カセンシキ」と読んできたが，学術用語では「カセンジキ」が使われている。旧河川法にある「河川敷地」は河川の敷地という概念で，堤防や流水部分も含めて言っていたが，現在使われている「河川敷」は堤防や流水部分は含めず，低水護岸と高水護岸の間，すなわち洪水時に水に浸かる部分だけを指して「河川敷（カセンジキ）」と定義している。放送用語で「カセンシキ」「カセンジキ」両方をとるのはいいと思うが，「河川敷地」から「河川敷」が派生したということではなく，ふたつの言葉は意味している場所がまったく違う。「見え隠れに」を新しくわける必要があるのだろうか。

山下洋子（やました ようこ）

注：

1）『谷崎潤一郎全集第 21 巻』（中央公論社・昭 58）収録「気になること」参照

2）塩田雄大（2010）「全国アナウンサー音声調査の結果報告～アクセント辞典改訂専門委員会（第 4 回）から～」『放送研究と調査』第 60 巻第 5 号
塩田雄大（2011）「『NHK 日本語発音アクセント辞典』改訂調査結果にもとづく作業方針の検討～アクセント辞典改訂専門委員会（第 5 回）から～」『放送研究と調査』第 61 巻第 3 号

3）山下洋子（2013）「放送用語委員会（東京）ことばの読みについて～『NHK 日本語発音アンクセント辞典』改訂にあたって～」『放送研究と調査』第 63 巻第 10 号

4）『アクセント辞典』（平 10）では，「サポーター」「ドライバー」「パンツ」などで，アクセントによる意味分けをしている。
サポーター：ファン（支持者）の場合「サポーター→」「サポ＼ーター」。保護具の場合「サポ＼ーター」「サポーター→」
ドライバー：ねじ回しの場合「ドライバー→」。運転者の場合「ドラ＼イバー」「ドライバー→」
パンツ：ズボンの場合「パ＼ンツ」「パンツ→」。下着の場合：「パ＼ンツ」

第 1372 回放送用語委員会（東京）

【開催日】平成 25 年 9 月 27 日（金）
【出席者】青木奈緒 氏，天野祐吉 氏，井上史雄 氏，井上由美子 氏，荻野綱男 氏，清水義範 氏，野村雅昭 氏，町田　健 氏
阪中信之 NHK 放送文化研究所長 ほか

平成 10 年から NHK 放送用語委員会委員をお務めくださった天野祐吉委員は，平成 25 年 10 月 20 日に急逝されました。謹んで哀悼の意を表します。